HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	人を起点にしたまちづくり ： ローカルベンチャーのこれまでとこれから
Author(s)	宮, 久史
Citation	科学技術コミュニケーション, 25, 81-87
Issue Date	2019-07
DOI	https://doi.org/10.14943/89918
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/75052
Type	departmental bulletin paper
File Information	09_miya.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

小特集ノート：寄稿

人を起点にしたまちづくり
～ローカルベンチャーのこれまでとこれから～

宮 久史[1]

Regional Development Based on Local People:
So Far and from Now of Local Venture

MIYA Hisashi[1]

キーワード：まちづくり，ローカルベンチャー，厚真町

Keywords: regional development, local venture, Atsuma town

1. はじめに

この発表の前に，都木先生や，西尾先生や，奈須さんたちと打ち合わせをしていたのですけれど，「北大ロッジ」については，ぜひ厚真町にも作ってほしいと，さっそく営業をさせていただきました．

地方創生とか地域活性化という話がある時に，大学生の皆さんが地域をウロウロするだけで，もう地域活性化は始まるのです．地域で欠けている大事なピースは，大学生の世代の皆さんです．皆さんが地域を歩くだけで，もう地域の人たちは「え？　何？　変わり出すの，厚真町？」みたいな雰囲気が必ず生まれます．なので，新渡戸先生もおっしゃっているように，どんどん地域に行って，ウロウロしてください．そうして，地域の皆さんとお話をしていただくと，それだけで地域の皆さんはとても喜ぶし，色々教えてくださると思います．

そんな厚真町ですが，2018 年 9 月 6 日に地震が発生しまして，深層崩壊というかなり深いところで地滑りが起こり，山が崩れる場所も発生しました．この写真（図 1 ）は，その深層崩壊した場所の写真でして，そこは山の尾根が 350 メートルぐらい地震によって動いたという場所なのです．350 メートル動いた先に，山の尾根の基岩みたいなものが残って露出していたのです．その露出していた基岩の上に木が 1 本立っていて，「あぁ，あいつも頑張っているし，頑張ろうかな」みたいな気になった，そういう深層崩壊の土



図 1　厚真町の震災の象徴的な場所

2019年4月2日受付　2019年6月6日受理
所　属：1. 厚真町役場産業経済課兼まちづくり推進課
連絡先：keizai@town.atsuma.lg.jp

地であり，象徴的な場所の写真です．

僕は今 38 歳で，厚真町役場で働いております．新渡戸先生出身の岩手県出身です．北大の博士課程を修了したあとに札幌の NPO で働いていたのですが，その時に厚真町で林業職を募集するのを見まして，NPO の仕事はとても楽しかったのですが「もう少し林業の現場で働きたいな」という思いがあって転職いたしました．

2. 林業への思い

林業に対する思いが元々どこからきたかと言いますと，僕の高校生の時までさかのぼります．まだ持続可能という言葉は無かった時ですが，持続可能な社会づくりに貢献というとおこがましいのですが，持続可能な社会を作っていきたいという流れの中で僕も仕事をしたいと思いました．その中で，僕のアプローチとしては利用と保全とを両立させながら生産させる木材が，もっと社会の中に流通する，もっと木材がいろいろなところで使われていくというのが人間社会の持続可能性を高めていくという仮説の元，林業を研究するという道を選び，大学に進学して博士課程まで行ったわけです．

博士課程まで行って，もちろん研究職になろうと思っていたのですが，ずっと勉強していく中で，僕らは森林科学のことを林学と呼ぶのですけれど，林学の人たちの中で「林学栄えて林業滅びる」という言葉があるのです．林学は，結構伝統的な学問で，研究者がたくさんいます．森林学会に行くと，いっぱい先生がいるのですが，果たして日本の林業は栄えているのかと考えてしまいます．こんなに研究されているはずなのに，ずっとネガティブな情報が流れてくるのです．「全然経営がうまく行っていない」とか，九州の方ですごく海抜が進んで森林破壊が進んでいる話や「何年前の話なんだ，それは？　今ですか？」のような，そういうことが起こっていました．研究というアプローチで持続可能な社会づくりに参加したいと思っていたのですが，むしろ研究してきたことを活かすために現場に行き，実践して，問題提起や現場に必要なことを，もっと現場に近いところでやることが今必要なのではないかと考えました．それを僕がやりたいという思いで，厚真町に行くことにしました．

3. 持続可能なまちづくり，そして大切なこと

そういう活動をしていく中で，林業の担い手対策として，平成 26 年度から色々と担い手を育成して，7 人の担い手を厚真町で確保しました．厚真町で林業を専業で働いている方が 18 人ぐらいいる中で，7 人確保してきているということは，小さい社会の中では結構意味のある事業だと言えます．今までは高性能林業機械を購入するための補助金を国から引っ張ってたり，町民が参加する散策会を企画したり，厚真町の認定こども園に使われている木材が厚真町産材なのかと検討したり，オーソドックスな林業振興策をずっと続けてきていたのです．それはそれで意味があったのですが，厚真町の人口動態を見ていくと，やはりジワジワと下がっていきます．国立社会保障・人口問題研究所（以下，社人研）というところの推計でいくと，ずっとつるべ落としに落ちていくというような結果になっています．林業を一所懸命にやっている中で，ふと立ち止まって考えたのは，厚真町の林業が栄えても，まちはどうなっていくのだろうということです．それは，まちが持続可能な形になっていくための一助としての僕の林業の活動でもあったと思うのですが，やはり林業だけでは解決できない課題がたくさんあります．林業者が増えてきても，林業者が幸せに暮らせるまちづくりができていなければ，やはり不完全なのだろうという課題意識がありました．今，まちづく

り推進課も兼務しているのですが，林業だけではなく，まちづくりのほうにも関わっていこうと考えました．

「関わっていこうと考えました」というのは，うちの町役場が，一職員が言うことで簡単にコミットできそうな言い方だったのですけれど，その前には色々な根回しがありました．うちの役場は，結構，自由で人の話を聞いてくれる役場だったので，「良いんじゃない？　やりたいなら，やってみな」という話になって，ローカルベンチャースクールという，起業家を育成するようなプログラムを始めました．

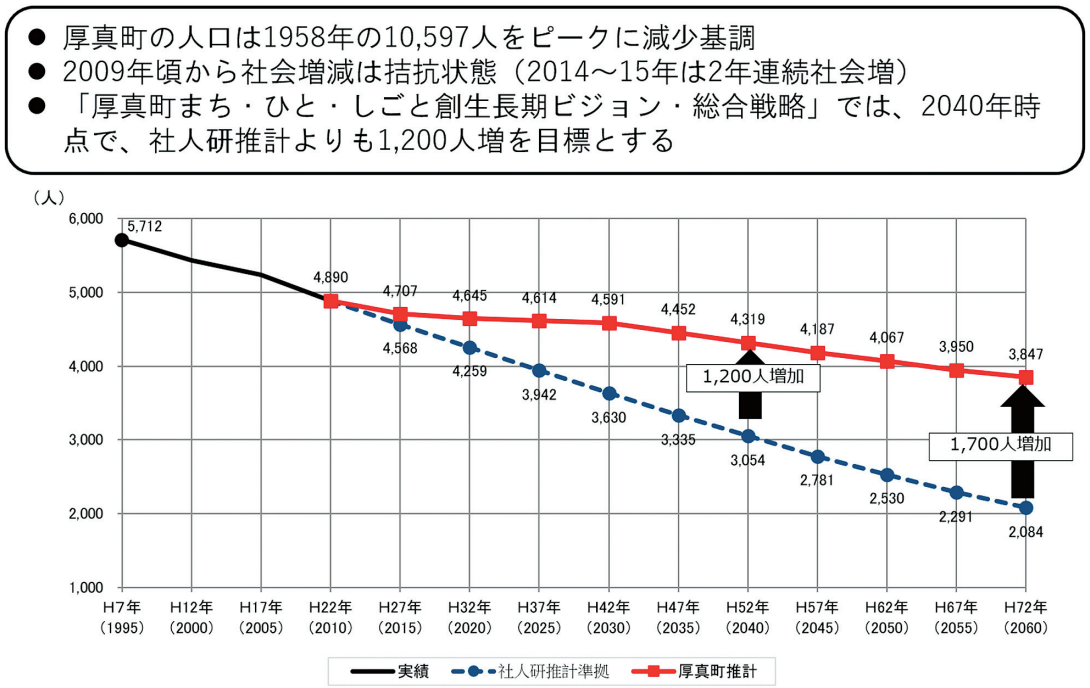


図２　厚真町の人口の推計

それは要するに，持続可能な町を作るためにどうしたら良いかということを考えていく作業です．ただ，持続可能な町を作るために必要なものというのは，色々言われるわけです．人やお金も無く，資源もなかなか限られます．この後に出てくる下川町さんは「やはり林業だよね」と言われます．そういう意味で言うと，チョウザメの美深町さんは，資源として元々無かったチョウザメを入れているわけですから，すごくチャレンジングな資源の作り方だと思います．こういうものが色々必要だと言われるのですが，僕らのような地方の小さい地域にとってみれば，一番必要なのは圧倒的に人です．人が，とにかく足りないです．人がいれば，お金は引っ張ってこられます．人がいれば，資源を勝手に見つけてくれます．

例えば，ハスカップという果実で考えてみましょう．厚真町はハスカップが特選品と言われていますが，ハスカップを本当に取り組もうと思う人は，すごく少なかったのです．ただ，ハスカップをどうしてもやりたいという情熱のある人が，ハスカップを地域の産業にしたいと思い，自分の資材も投げうって注力していくことでハスカップの作付面積は広がり，ハスカップの品種改良が進み，厚真町のハスカップの生産量も増えてきています．そのように資源についても，もともとあるもの

ではなく，人とくっつくことで改めて資源化されるということがあります．本当に人なんです．人がとにかくいれば，始まります．むしろ，人がいないと始まらない話なのです．そういう意味で僕らは，まずは人を集め，人に注力した事業の組み立て方をしていくことを，もう１回，始めなければいけないと今思っています．

4. ローカルベンチャーにおける本気と覚悟

厚真町というのは，厚真町のまちづくりの基本である，厚真町総合計画というのがあるのですが，その中で，「あつまる　つながる　まとまる」で，あいうえお作文で「あつま」になります．ただ，始まらなければいけないと思うのです．それにあつまっている時点で「まとまって」いるので，今回勝手に変えて「あつまる　つながる　はじまる　厚真町」でまず始めようと思っています．「始まる」ということが，厚真町だけでなく地域ですごく少ないです．それはある意味，チャレンジが少なくなっているとも言えて，そういう始まることから始めようということが，今僕らのテーマの一つです．

僕らは，そういう地域で始まる新たな事業や活動のことを，ローカルベンチャーと呼んでいます．ローカルベンチャーというのは，ローカルでベンチャーを立ち上げる人を作ろうということでもあるのですが，始まること，始めたいと思う人たちを全力で応援する場，それがローカルベンチャースクールなわけです．そういうローカルベンチャーを，今始めているというところです（図３）．



図３　厚真町のローカルベンチャースクール

因みに，ローカルベンチャーというワード自体は，2018 年の安倍首相のメディア向けの講演の中でも使われてきていて，少しずつ認知度を得てきている言葉なのではないかと思っています．

僕らはローカルベンチャースクールという名前で，何かを始めたいという人たちを対象に，事業プランのブラッシュアップする場を設けて，ベンチャー企業の社長のような人たちを呼んで，専門家と事業プランをブラッシュアップする場を作っていきます．その場所で僕らが一番重要視しているのは，やはり本気と覚悟です．あなたがそれを本当にやりたいのですか．誰かのためにじゃなくて，あなた自身がそれをやりたいかどうかということを大事にしていて，そこだけ本当に突き詰めます．やらされる事業というのは，必ず辞めたくなってしまいます．途中で続けられなくなってしまうのです．でも，自分がやりたいという事業については，やはり最後まで諦めずにできます．

ローカルでベンチャー企業を起こすということは，大変リスキーなことです．普通に考えて，そんなに簡単なことではない．2〜3 年後に来るデス・バレーと呼ばれる，本当に廃業するかどうかというギリギリのところを越えていけるかどうかは，最終的にはその人が持っている強い思いにかかっているわけです．なので，僕らはローカルベンチャースクールをするときに，本気と覚悟を持って，あなたのやりたいことをプレゼンしてくれているかということを重視して，その人の事業やその人自体に向き合い，その人の事業プランをブラッシュアップしていくようにしています．

5. ローカルベンチャースクールと震災

ローカルベンチャースクールというのは，20〜30 人の参加者の事業プランをいちいち聞いて，みんなでブラッシュアップをしていく場です．例えば，もともと IBM ジャパンのベンチャーキャピタルの社長で，1,000 社以上のベンチャー企業に融資をしてきたようなすごくベンチャー企業に多く縁のある人に来てもらって事業プランをブラッシュアップしてもらったり，本当にそれはあなたのやりたいことなのかどうかをメンタリングしながら向き合ってもらったりしながら，事業プランをチェックしていっています．

ローカルベンチャースクールに来てくださっている方々は町外からもいますし，町内からもいます．町外から来る方は，もしローカルベンチャースクールによって事業プランが採択されると移住して来られて，条件が合えば，地域起こし協力隊という制度を活用して，最長 3 年間，町から月々 20 万円程度の報償費を得ながら起業の準備をしていきます．なので，ある意味命綱が付いた状態で起業の準備をしていける状態で，それが 3 年間続きます．

町内の方々は地域起こし協力隊になれないので，ここでブラッシュアップされた後，さらに専門家とブラッシュアップしていったり，起業するときに必要な補助金を町から支給したりすることに繋げていくような場になっています．

厚真町のローカルベンチャースクールは，合宿形式の選考会で，東京であろうと札幌であろうと，とにかく厚真町にみんな集まって，みんなでブラッシュアップします．それを 2 回やります．平成 28 年からローカルベンチャースクールという事業を始めていまして，平成 28 年度には 6 名参加されて，3 名合格されました．平成 29 年度には 21 名参加されて，5 名が合格されました．厚真町で企業をしたいという人たちが，だんだんと集まり始めてきているような状態だったのですが，9 月 6 日に震災がありました（図 4）．

まだこのときは平成 30 年度のローカルベンチャースクールの募集をしている状態だったのですが，発災から 4 日後ぐらいで，今年のローカルベンチャースクールはできないなと思って，1 回中止にしたのです．中止にした理由はいろいろありますが，移住してきて企業したいという方々を対象にしている事業であるので，そういう方々に対して今の厚真町に「移住してきてください」と言えないということが大きかったです．状況も変わってしまったので，どのぐらいケアできるかも分からない中で，たくさんの町民の方々が大きく傷ついてしまったので，そういう方々を横目にしながら移住政策を取っていくことができるのだろうかという思いがありました．それで 1 回，中止にすることに決めたのですが，結局 11 月頭に再開することを決めまして，ローカルベンチャースクールを開催したのです．

それは，大きく挙げると二つ理由があります．まずは町民の皆さんの温かさが震災後も変わっていないということです．震災後も失われていなくて，町民の皆さんから役場職員に対して，すごく温かい言葉をかけていただいたり，移住者を支えたりしていました．もう一つは，震災があったからといって今までやってきた事業をふいにする，もしくは外部の力を借りていく一つの手法としてのローカルベンチャーを止めるということが，本当に将来の厚真町のためにならないと考えたからです．むしろ，町民の皆さんの復旧と併せて，こういう外部の力も借りながら厚真町の未来を描いていくということこそが，震災後の未来の厚真町を作っていく上で必要なのだろうという結論に達しました．復興と復旧は両立し得る，そうしていくことこそが厚真町には必要だという結論から，ローカルベンチャースクールを今年もやることにしました．

実際大きく変わってしまった厚真町に，どのぐらいの応募者が来てくれるかなと思ったら，15 名ぐらい応募者が来てくれて，またきたいと言ってくれる人が今でもたくさんいる状況です．特に，やりたいことが厚真町にあるということや，今だからこそ厚真町でやりたいという人がいます．も



図４　北海道胆振東部地震の際の厚真町の被害

しやっていなかったら，厚真町に来たいという人たちの可能性を閉ざしていたのだろうなと思っているので，本当に始められて良かったなと思っています．結局，15 名参加されて３名が合格して，今移住してくる準備をしてくださっているところです．

6. 今，厚真町の人々は

ローカルベンチャースクールの中から，いろいろなベンチャーが生まれてきました．最後にそのベンチャーを紹介したいと思います（図５）．

例えば，１個 50 円の卵を売っている養鶏業者の彼は，周りに人家が無いほうが都合が良いのです．だから，厚真町の中でも特に人がいないところで養鶏を営んでいました．人がいないということが，普通は資源ではないですけれど，彼が来ると資源に変わるわけです．彼も，すごく深刻な被災をして，１年半前に建てた家が全壊したり，建ててきた鶏舎が全部壊れて，2,000 羽になっていた鳥が全部ゼロになってしまったのですけれど，３ヵ月後には再開して，今卵を作っています．すごく力強い背中で，僕らを引っ張ってくれている一人のローカルベンチャーです．

厚真町は炭焼き屋さんが多いのです．炭窯は１枚，２枚と数えるのですが，ここに映っている炭焼き職人の方は炭窯を４枚持っていて，炭窯は粘土で出来ているものですから，今回の震度７の地震で全部壊れたのです．彼も若いので，転職することも考えたのですけれど，やはりもう１回，炭を焼きたいということで，今もう一度炭窯を再建して，木炭で生産していきたいと頑張ってくれています．

ホウレンソウ農家は今回の震災でハウスが壊れたり，地震の前に来ていた台風でハウスが壊れたりと，すごく被災したのですけれど，やはりまだ厚真町で農業をしたいと言って，再建に勤しんでくれています．

例えば，厚真町に来たローカルベンチャーの一人で，個人貿易商をやっている方もいます．厚真町は苫小牧に近いことと，新千歳空港に近いという価値があるのですけれど，その価値を本当に活



図５　様々なローカルベンチャーが立ち上がっている厚真町，震災の被害も大きかったが…

かした人はいなかったのです．しかし彼は,「自分は貿易ができるから厚真町でやりたい」と言って，初めて新千歳空港に近い，苫小牧港に近いというメリットを活かした事業を厚真町でしたいと言ってくれた方です．

他にも馬で林業をしたいという人だとか，通販会社のフェリシモという会社ですけれど，その会社から来てくれて今フェリシモと厚真町の職員という二足の草鞋を履きながら厚真町で働いてくれている方もいます．今，どんどん集まってきてくれています．

そんないろいろあったのですけれど，一つの結果として，転入者と転出者の差分を調べてみたら，転入超過だったのです．ジワジワやってきたまちづくりが今も繋がっていて，震災があったけれど転出する方よりも転入する方のほうが多いということが確保できたということが平成 30 年度を締めくくってくれました．

こういう人口の話は，つい町でしがちですが，今僕らが大事にしているのは新規法人登記数という，どれぐらい会社が起きているかです．ローカルベンチャーから新規法人登記するのは，平成 30 年だけで 4 件生まれてきていて，人口だけではなくて産業自体も生まれ始めてきているなということがあります．

7. 最後に

最後になりますが，東日本大震災の被災地域から,「結局，地域の社会課題の解決無くして真の復興は無いんだよ」という金言をいただいて，そういうことに一つ一つ取り組みながら，今後も厚真町の復興・復旧に取り組んでいきたいと思います．また，一人一人の幸せな個の集合体としての厚真町，自分らしく，自分のペースで生きられる場所としての厚真町が，これからの厚真町を作っていく上で一つ大事なテーマなのだろうなと思いながら，ローカルベンチャースクールという事業を続けています．